

新聞への注文



長野県NIE推進協議会会長

信州大学教育学部教授 澁澤文隆

一つの記事の中に知っている漢字がいくつあるかを調べる、新聞に出ている地名を地図帳で調べて確認する等々、小学校、中学校のNIE指定校の取り組みをみるたびに、こんな活用の仕方もあったのかと、先生方が創意工夫して新聞を活用しようとする前向きな姿勢に感動する。しかし、一方でそのように創意工夫すればするほど、新聞本来の持ち味を発揮させないような、本道というよりも脇道で勝負するような試みを展開していったよいのだろうか、疑問に思えてくる。子どもに小さいころから新聞に触れさせ、新聞に親しみを感じさせたり、活字に親しませて活字離れを防止したりする努力は貴重である。しかし、それは新聞記事を読み、その内容を学習に生かすという、新聞を本来のかたちで活用するからこそ生み出されてくるものなのではないか、と思われるからである。

大人でも読まないページがあり、新聞代がもったいないからと定期購読しない家庭が増えているという。冷静に考えれば、その新聞を小学生、中学生に読ませるといのは、童話に替えて芥川賞の受賞作品を持ち込み、教科書として読ませるようなものであり、内容的にも能力的にも無理があるといえよう。だから、指定校といえども本来の新聞の活用の仕方では、高等学校はともかく、小学校、中学校で対応するのは困難であり、どうしても脇道的な工夫で対応することになる。そうした工夫、努力は貴重であるが、一方でそれだけにそうした成果を指定校以外に広めるのはなかなか難しいといえよう。

では、どうすればよいか、特に妙案がある訳ではない。ただし、この問題の所在は、大人用の新聞を子どもに読ませようとする点にある。それだけに、NIEの発想に立脚すれば、新聞が大人用であるという、この点に改革のメスを入れる必要があるといえよう。テレビは、器用に、幼児向け、児童向け、お父さん向け、主婦向け、高齢者向け等々、時間帯を考慮して巧みに番組を編成し、提供している。インターネットも随分と整備され、主婦向け、子ども向けなどの情報も提供されるようになっている。

このように考えると、世代を超えて親しみ、活用する新聞になるためには、新聞の中に子ども向けページ、高齢者向けページ、親子で共有できるページなどを設定するような、テレビの番組構成に見合う思い切った改革が必要になるのではないか。新聞は、紙面という、静止画で空間的な広がりをもっていることから、みんなで囲んで読んだり、回し読みをしたりすることが可能といった特色がある。それは、本来、一家だんらんの場に馴染むことを意味している。

ゲームや遊びではなく、世の中の動きや人類の課題など、子どもの段階から関心を持ち、取り組んで欲しいことはたくさんある。子どもの目線に立って事象をひもとき、これまでの記事にないようなわかりやすさで紹介するようにすれば、各指定校での実践研究も本道を行くかたちで取り込まれ、普及に値する実践が生み出されるようになるであろう。

新聞に対していろいろ注文したが、これはNIEに携わり、この活動を軌道に乗せるための課題意識であり、提言である。今回も労を惜しまない前向きな実践がたくさん開発されたことに対し、関係者の皆様方に深甚の謝意を申し上げます。